図々しくなることの大切さ

総合文化科学課程
比較文化専修
松本祥子

長年の夢

十一歳の時の英語との衝撃的な出会い。それからもう十年。ただその「音」だけに惹かれて、「しゃべれるようになりたいな」と思った頃、十年後の自分の姿を想像することはできませんでした。

ことばを身に付けるということは、それがたとえ母語であっても、そこには永い道程があると思います。高校生の頃からの私の夢は、英語を学ぶことにこだわり続けるのではなく、いつかは英語で学びたい、ということでした。そして二〇〇〇年の夏、ついにその夢を叶えることができました。

ＣＭＵの授業

ミシガン湖とヒューロン湖にはさまれるミシガン州ロウアーペニンシュラのちょうど真ん中、マウント・プレザント市にあるセントラルミシガン大学（ＣＭＵ）。キャンパスは美しい自然に囲まれ、四季の移り変わりを楽しむことができます。（でも、四季のうち最も長いのは冬なのですが。）

それまで、イギリスとカナダでそれぞれ一ヶ月程度の語学研修の経験がありましたが、アメリカの大学で、言語のハンディを持たないアメリカ人の学生とともに学ぶことは、楽しいことばかりではありませんでした。しかし、それは同時に、私の価値観が一変してしまうような毎日でもありました。

ＣＭＵでは、私の卒業論文の分野である言語学に関する授業をとっていました。どの授業でも、先生が言っていることはほとんど理解でき、配られるハンドアウトにも手こずることはほとんどありませんでした。しかし、自分の意見を述べたり、課題のペーパーを書いたりするのには苦労しました。また言語学の授業のため、先生から「こんな文法構造は日本語にはあるの？」とか「日本語のライティングシステムを簡単に説明して」と言われ、クラス中が私に注目することが何度もありました。

図々しくなること

そのような環境の下で、私は、英語を操る能力より、自分のペースを守ることを身に付けました。

「私は英語のネイティヴじゃない。理解してもらえなかったら、もう一度言えばいい。何を言っているかわからなければ、わかるまで何度でも言ってもらえばいい。」

図々しいと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、これくらいの図々しさがなければ、先生や他の学生から取り残されてしまうように思ったのです。

こんなふうに考えることができるようになるまで時間はかかりましたが、こう考えることで、肩の力がふっと抜けたような気がしました。自信がないからと小さな声で話したり、わからないと言ってしまったりするより、少しくらい間違えていても、堂々と話した方が自分も気分がいいものです。

日本人には控えめであることを美徳であるという考え方があると思います。私は、この考え方を否定しているわけでは決してありません。むしろ、思ったことをなんでもズバズバ言ってしまうより、人と人との関係が和らいでうまくいくのではないかと思います。しかし、アメリカの大学生活を経験してみて、控えめであることを評価されたことは一度もありませんでした。アメリカの大学で生き残っていくためには、思ったことは何でも言い、わからないなら何でも尋ねる、という姿勢が不可欠だということを身をもって知りました。